

<書評>

(『北國新聞』 2019年2月2日(土)朝刊)

『開成をつくった男、佐野鼎』(柳原三佳著・講談社)

■地球一周した加賀藩士

評者／松田章一(劇作家)

幕末の加賀藩士、佐野鼎の伝記小説である。

佐野は、江戸下曾根塾頭から長崎海軍伝習所の1期生となり、のちに加賀藩に仕え、万延元(1860)年に遣米使節団の一員として渡米した。

この使節団はホワイトハウスで米国との通商条約批准書を奉呈した徳川幕府の正式の使節団である。その従者の一人として加賀藩から潜り込んだのが佐野であった。

初めて目にした異国での探訪は物見遊山ではなく、水道、水洗便所、博物館や海図、学校や孤児院、点字などに及ぶ。帰途はアフリカ喜望峰を回り、インド洋を経て地球を一周して帰国した。

翌年、遣欧使節団にも加わっているから、加賀藩では最初に米欧世界を見た藩士である。

帰国後は加賀藩の軍艦奉行補佐として発機丸の回航や金石砲台建設などの任に就いた。

福井での水戸天狗党の対応にも加賀藩士永原甚七郎とともに温情をもって当たった。その後、藩の科学研究所壮猶館(今の知事公舎)に出仕、さらに七尾港整備や卯辰山開拓にも藩主慶寧とともに取り組んでいる。

また、七尾語学所のお雇い英国人オズボンの招聘に尽くし、後の科学者桜井錠二、海軍大将瓜生外吉らを育てる手助けもしている。

晩年は開成学園の前身、共立学校を創設したが、コレラのため49歳の若さで死去した。

「勝者の立場から事実が誇張され、時としては曲げられ」た薩長中心の明治維新史ではない、ノンフィクション作家の目から見た歴史が描かれていて心地よい。幕末の近代史がこのように丁寧なまとめられたのは、作者の長年の資料収集とその研究によるものである。

佐野鼎の本籍は現在の静岡県富士市だが、作者は佐野の本家筋の子孫である。佐野への親近感がこの大作になったものだろう。

巻末の参考文献の綿密さは驚くべきで、今後のさらなる佐野鼎研究の導きともなるだろう。